

六、海への町で

(一)

たろうくんは、おかあさんといっしょに、いなかの町へいきました。ここは、おかあさんが生まれた町です。

町は、かいがんにあるのですが、鉄道は、すこしはなれた山の手を通っているの、駅からバスに乗りました。

しばらく雨がふらないと見えて、白くかわいたろうろからは、しきりに、ほこりがまきおこっています。道のりょうがわには、たんぼがつづいていて、ところどころに、おひやくしょうのすがたがみえます。町へはこんでいくのでしょう。やさいをリヤカーにいっぱいつんだ、じてん車が走っています。

町へ入ると、きゆうに、にぎやかになりました。いろいろな店がみえます。道ばたには、よく日にやけた、元氣そうな子どもたちが、たくさんいます。バスは、小さなはしのでまえてとまりました。おりると、すぐ目のまえを。ゆっくり川の水がながれています。どこからともなく、しおのにおいがしてきます。

「おや、お母さん。この川どっちにながれているの。」たろうくんは、ふしぎに思ってたずねました。川の水は、すこしずつ、山の方にむかって、ながれていきます。「まあ、たろうさん。よく気がついたのねえ。この川も、いつもは、海の方へながれているのよ。でも、すぐ近くで意味にながれこんでいるものだから、海の水があがってくるときは、それにおされて、ぎやくにながれることもあるのです。ほら、この水は、海のにおいがしているでしょう。」

「ほんとうに海の水があがってくるの。」「そうよ、たろうさん、いつか海岸で遊んだとき、波のくる場所が、朝とひるとでは、ずいぶんちがったじやありませんか。おぼえてる。」

「ふうん。」たろうくんは、くびをかしげて考えこみました。ふたりのあるいていく道ばたの家には、さかなをずらりとならべてほしてあるのが目に付きます。ふんと、りょうしの町らしいにおいがします。

だんだんかいがんが近くなってきました。しかし、波の音は、まだきこ

えてきません。大きなあみをほしてあるところも通りました。

やっと、まつ原にでました。青いうつくしい海がみえます。

「やあ、海だ。」

たろうくんは、まつすぐに、すなはまのほうにかけ出しました。おかあさんも、うれしそうについてこられます。

海は、たいそうすずかでした。なみうちがわに行ってみると、小さな波が、チャポンチャポンと音をたてていました。すなのなかに、きらきら光るかいがころがついています。



ふたりは、すなの上に、こしをおろしました。遠くの方に、うっすらとみえているのは、きっと大きな島でしょう。ふりそそいでいる日の光でうつくしくかがやいているみずのむこうに、小さな船のうかんでいるのもみえます。

「おかあさん、あの船、なにしてるの。」

「さかなをとっているのですよ。りょうしさんが、大きなあみでとっています。」「どんなさかなをとるの。大きいのもとるの。ぼく――前に、海でおさかなとったねえ。」



たろうくんは、まだ学校にあがらないまえ、つれていってもらった、しおひがりのことを思い出しました。

そうです。そのときには、海の水がずっとおきまでひいて、たくさんの人が、はだしでかいをひろっていました。たろうくんも、おとうさんにてつだってもらって、かいを

見つけたり、小さなさかなをすくったりしました。

「わかったよ。ぼく。おかあさんのさっきいったこと。海の水がにげてしま

うと、いつかおひがりのときみたいになるんだねえ。いまみただと、か
いがひろえないもの。」

おかあさんは、にっこりして、たろうくんのうわぎのえりをなおしてくださ
いました。遠い水のむこうに、ぽっかりと、白いまるい雲がうかんでいま
す。

(二)

あくる日から、たろうくんは、まいにちかいがんにでてみました。海の空
氣は、すがすがしくて、たいそうよいきもちです。

このあたりは、すこし入りこんで、わんになっているので、右ての方
には、青いまつ林の丘が、海のなかに、ぐっとつきでています。青い林の
なかで。ところどころ、うすあかくみえるところは、きっと、もみじでもあるの
でしょう。白くつついているすなはまの上には、りょうをしている人たちの
すがたが、ぽつぽつと黒い点をうったようにみえます。



波うちぎわでは、じびき
あみというおおきなあみ
を、男の人も女の人も、
こどもたちまででて、いっ
しょうけんめいにひいてい
るのをみました。ひきあげ
たあみのなかには、大きな
さかなや小さなさかながび
ちぴちはねていました。
「えんやらほう、えんやら

ほう。じびきあみのかけ声は、ずっとむこうのはまからもきこえてきます。

あるとき、たろうくんが、すこし西の方のかいがんまでいってみると、ま
つ林の近くで、さかんに白いけむりがあがっていました。



ふしぎに思って近よってみると、小さなこやがふたつあって、おおきなかまをたちつけています。

おもしろくなったのでのぞいてみると、ひとりの男の人が、かごにいっぱい、白いものを入れて、でてきました。なかなかおもそうにみえます。

おや、おさどうかしら――と、たろうくんは思いました。

思いきってたずねてみますと、海の水から、しおをとっているの

だ、とせつめいしてくれました。しお水をたいて、水けをとると、あんな白いしおができるのだそうです。おさとうだと思ったのは、しおだったのです。

たろうくんは、これまで、海の水のしおからいことは知っていましたが、りょうりに使うしおが、こうしてつくられるということは、きょうはじめてわかりました。

これはきっとみっちゃんも知らないぞ、とたろうくんは、すぐに知らせてやりたくなりました。

しおは、しおからくて、あまりありがたくないような氣もしますが、帰って、おかあさんにきくと、人のからだには、ぜひなくてはならない、ひじょうにたいせつなものだということです。

(三)

おかあさんお生まれた家の近くには、小さな工場があります。ここへは、まいにち、たくさんのさかながはこばれてきます。工場では、なまのさかなに、いろいろと手をくわえて、またどンドン送り出しています。

なまのさかなは、そのまま、遠くの町まではこばれていくと、きせつによつてはとちゅうでくさったりすることがありますから、とれるとすぐにほしたり、しおにつけたり、くんせいにしたりするのです。



こうしておけば、長い日がずをかけて、遠いところへ送っても、わるくなる心配がありません。ことに、かんづめにしたものなどは、外國にまで送られていきま

す。

たろうくんは、まいにち、りょうをしている人たちのようすをみるのがたのしみでした。そして、目のまえでとれたさかなをみるのが、たいそうゆかいでした。

としおくんやみつこさんと、いつか町へいったときは、とうとうとかいの魚いちばをみにいけませんでしたが、こういうところでとれたさかなが、かもつ列車やトラックで、どんどん町のいちばへはこばれるのでしよう。

とかいで、店にならんでいる、ほしざかなやくんせいも、みんなこういふふうにしてとれたものが、いろいろと手をくわえられ、いろいろな人の手を通つて、はこばれていくのでしよう。



たろうくんは、かいがんへきたおかげで、どんなふうにして、さかなが町の人たちの手にはいるのか、よくわかったような気がしました。

さむい風のふく冬がやってきても、りょうしたちは、つめたい水にむれながら、さかなをとっています。なかには、なんにちも家をはなれて、小さな船にのりくみ、あ

ら波とたたかっている人たちもあります。それは、どんなになれたしごとであったにしても、けつして、やさしいことではないでしよう。

(四)



この町かた、小さな山ひとつこしたとなりの村には、いとこのとしおくんが住んでいます。たろうくんは、おかあさんとふたりで、としおくんの家へあそびに行くことになりました。

よくはれた秋のごぜんです。ふたりは、海にそった道を、ゆっくりあるいていきました。しばらくいくと、道が山のでにまがっ

て、だんだんのぼりになります。いつのまにか、まわりに家がすくなくなってきました。

さかなを買いに行くのでしょうか。大きなかごをせおった、わかい男の人といきちがいました。近くの山から切ってきたのでしょうか。たきぎをいっばいつんだ、にば車にもであいました。

のぼり道が長いので、たろうくんはときどき道ばたでやすみました。大きな木のねもとにある石にこしかけていると、どこかで谷の水のながれる音がきこえるようです。

「まあ、ごらんなさい、たろうさん。あすこに、道しるべの石がありますよ。村まで三キロと書いてあるわ。」おかあさんが、大きな声でいわれたので、たろうくんはびっくりしました。

「道しるべってなんなの。」

みると、その石には、字がふかくきざみつけられているようです。「道しるべというのはね、この道をいくとどこへでるか、また、ここから村やまちまではどのくらいの道のりか、と言うことを、石や木のはしらなどに書き付けて、通る人のべんりなようにしたものです。きっと、これからも、いくつかみつかりますよ。」

おかあさんは、そういつて、立ちあがりました。「さあ、もうすぐ、とうげですよ。そこで、おべんとうにしましょうね。」道はだんだんけわしくなります。



やっと、とうげにでました。ここは、たいそうよいながめです。ふたりは、海にむかった丘の上で、べんとうのおむすびをたべました。

目の下に、青々としたひろい海がみえます。のぼってきた方がくをみおろす

と、りょうし町のたてこんだ家々が、マツチばこをならべたようにです。おきにでている船は、点のようにちいさく見えます。

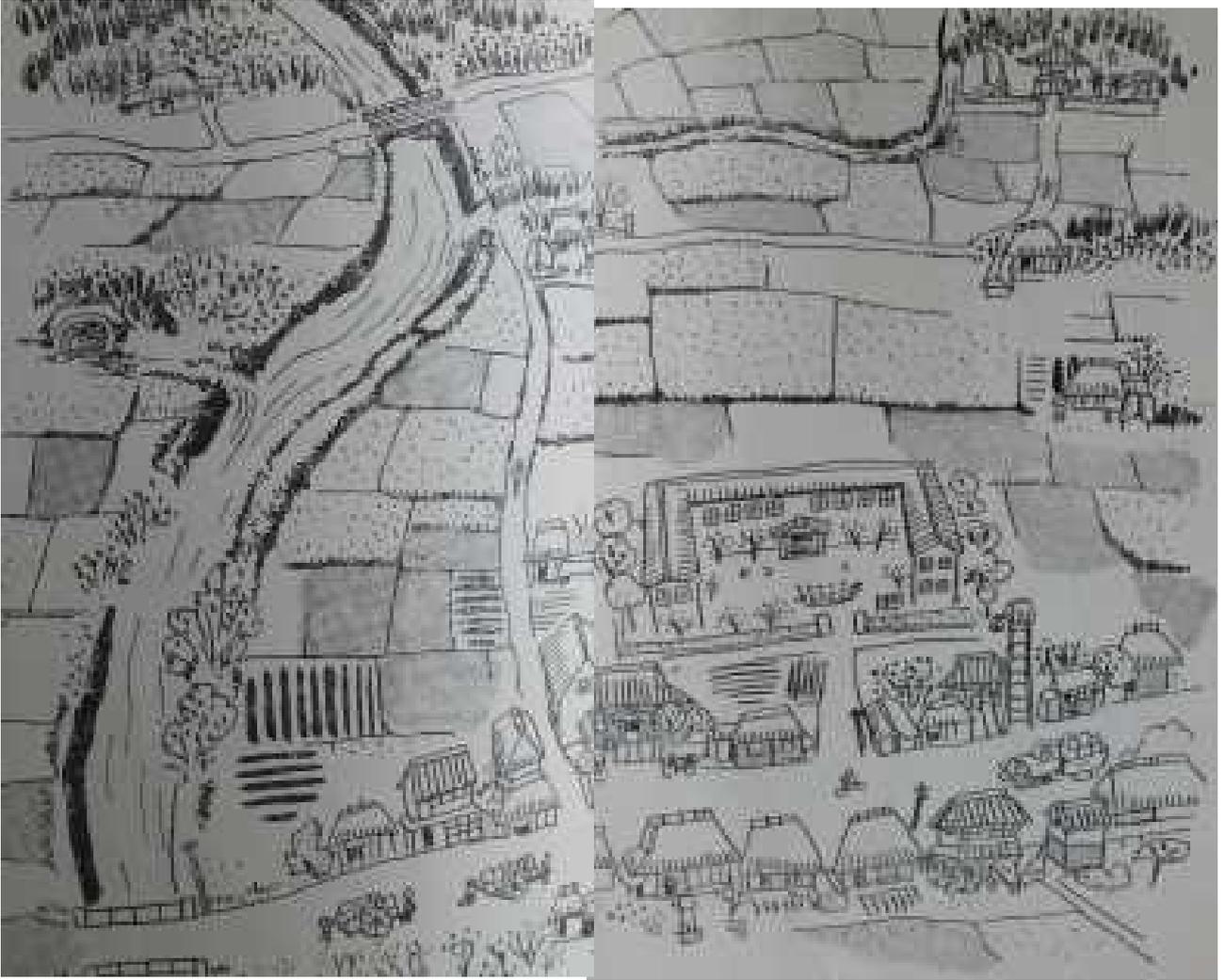
(五)

とうげ道をおあるいていくと、目の下に村がみえてきました。とりいれのすんだひろい田が、いちめんひろがっています。川が白く光って、ゆうゆうと田のなかをながれています。はしもみえました。

丘の上に立っていると、ずっと遠くから、うしのなく声がきこえてきます。にわたりのなく声もきこえるような気がします。ふたりは、くさむらにこしをおろして、しばらく、村のようすをながめました。

おかあさんがゆびさして、ひとつひとつせつめいしてくださいます。火のみやぐらの左に見える、大きなたてものは、学校です。そのとなりのかわらやねは、役場です。ずっとむこうの川のふちに、小さな森があります。そのすこし右には、おてらも見えました。

家は、わらぶきが多いようです。ところどころ、白いかべの大きな家も



あります。幾筋か、小さな川がながれていて、ひとつふたつ、水車があるのもみえます。きっと、この川から、田へ水をひくのでしょう。

としおくんの家は、学校のすぐ近くだそうです。むかいにちゅうざいしよがあるということですが、それは、ここからではわかりません。学校や役場のあるあたりは、いくらか家がこみあっているようですが、そのほかは、あちらこちらに、ぽつぽつと、のうかがみえるくらいです。人通りも、あまりありません。

たろうくんは、山のすぐ下の道を、米だわらをつんだ荷車が二だい、学校の方へむかっていくのをみつけました。おもそうに、あとをおしている人のすがたもみえます。

「おかあさん、あのお米、どこへはこぶの。「そうですねえ。なんのお米でしょう。そうそう、きつときょうしゅつかもしれないわ。それなら、たぶん役場へでもはこむのですよ。」きょうしゅつの米は、役場のかかりの人が、しなものとめかたとをしらべ、ごうかくしたものをまとめて、送り出すのだそうです。

とりいれも、すっかりおわりました。もう、きょうしゅつがはじまっているにちがいありません。

(六)



さかをおりていくと、もうぽつぽつ、のうかがあります。どの家も、町の家とはちがって、家のまえに、小さなひろばのような、ひろいにわをもっています。きょうしゅつの用意をしているのでしよう、男の人も女の人も、このひろにわで、いそがしそうにはたらいています。どのにわにも、むしろの上に、もみのついた米が、いっぱいほしてあるのが目につきました。

まだ、だっこきで、いねのほから、もみのまま米つぶを、うちおとすしごとをしているところもありました。もみがらをえりわけるきかいを、使っているところもあります。ブーンと風をおこして、もみがらをとばしているのがみえます。

女の人たちも、めずらしいので、なんどもたちどまってみました。そして、ずいぶんべんりなきかいをつかっているものだ、と感心しました。こういうきかいは、たいてい、きょうどうでつかっているのだそうです。「あれで、すぐたべられるお米になるの。」「いいえ、あれだけでは、まだ、もみがついていますから、せいまいじよへもって行って、きれいなおこめにしてもらおうのですよ。」

しかし、もみをとってしまうと、もちがわるくなるので、のうかでは、すぐつかわない米は、そのまましまっておくそうです。

せいまいじよは、電氣をつかっているものもあります。また、水車をつかっているものもあります。山の上からみた水車が、きっとそれでしょう。

にわにいどのある家が多いようです。いどのよこのかきの木に、よくうれたおいしそうなみが、いっぱいなっているところもありました。うしのなく声が、すぐ近くにきこえます。

だんだん、火のみやぐらが、近くにみえてきました。学校も、もう近い

のでしょう。二、三人、学校の帰りらしい、小学校の生徒に出会いました。



道ばたに、ざっか屋の店があったので、のぞいてみました。いろいろな品物を売っています。金物も、紙やふでも、茶わんやはしもありました。わらじまであります。

「まあ、さかなのひものもあるわ。」

「おかあさん、みっちゃん

のはくような、赤いげたもあるよ。」

おくの方に、しょうゆのびんらしいものをもみえました。いなかのざっか屋は、ひとつの店で、ずいぶんたくさんのしゅるいのものを売っています。ちょっと百貨店のようです。ざっか店をでて、しばらくいくと、赤いポストがみえます。そのよこに、ちいさなゆうびんきよくがありました。はいつてみると、しごとをしている人も、ふたりだけです。たろうくんは、おかあさんに、はがきを買っていただきました。

ここから、としおくんの家まで、五分くらいです。

そのばん、たろうくんは、としおくんとにいさんたちから、村の生活について、いろいろめずらしい話をききました。たろうくんは、町のことを話しました。考えてみると、とかいとのおうそんとそれにりょうし町とでは、ずいぶん人々のくらしかたがちがいます。住む家も、きているきものも、いろいろなたのしみも、たいそうちがいます。けれども、もし町の人やいなかの人が、それぞれ、自分のしごとに生をだすことをせず、また、たがいなたすけおうということをしなないならば、わたくしたちは、だれも、たのしい、べんりな生活をすることはできないでしょう。

のうそんで作った米ややさいは、りょうし町でとれたさかなとおなじように、汽車や電車やトラックで、とかいにおくられます。そして、とかいからは、きものや日用品や本やひりょうや、のうそんで使ういろんなどうぐが送られてきます。としおくんの村にも、こんどあたらしく、本屋ができるそうです。

こうつうがさかんになり、人のゆききや物のもちほはこびがやりやすくなるにつれて、わたくしたちの生活は、いよいよべんりになってきました。そし

て、遠い土地の人たちも、まるで、となりきんじよにでも住んでいるようになってきました。

たろうくんはいま、みつこさんへ、がいがんの町と、としおくんの村のお話を書いて、送ろうとしています。さあ、たろうくんは、どんなことを書いているのでしょうか。みなさんは、どう思いますか。